

Powerlessness はシステム正当化を高めるのか？

- van der Toorn et al. (2015) の追試的検討 -

○東 智美¹ ・ 糸賀日奈子¹ ・ 曾我部里紗¹ ・ 上村冴子¹ ・ 森永康子²(¹広島大学教育学部 ・ ²広島大学大学院教育学研究科)

システム正当化理論(Jost & Banaji, 1994)は、人々が現状を維持したいという動機を持っているために、既存の社会システムを公正で正統なもののみならずと主張するものである。さらに、社会経済的地位(SES)が低い(vs.高い)人の方がシステム正当化が強いという主張もあるが、これに関しては一貫した結果が得られていない。van der Toorn ら(2015)は、SES ではなく Power 感が低い、つまり Powerless であることがシステム正当化を導くと主張し、これを確認した。本研究では van der Toorn らに基づき、研究 I では、Powerless な人がシステム正当化し、そのことで主観的幸福感が高くなるという点を検討した。さらに研究 II では、Power 感を操作することで Powerlessness とシステム正当化の関連を検討し、加えて両者の間を感情が媒介する可能性についても検討した。

研究 I

方法 参加者 大学生 91 名。質問紙の構成 人生満足度尺度(大石, 2009; 5 項目; $\alpha = .838$), フィラー 8 項目, システム正当化尺度(Kay & Jost, 2003; 8 項目; $\alpha = .596$), フィラー 8 項目, Power 感尺度(Anderson et al., 2012; 8 項目; $\alpha = .786$)。すべて 6 件法。

結果と考察 SEM による分析の結果、Power 感は直接人生満足度を高めていたが、システム正当化を経る間接効果は見られなかった。つまり、Powerless 感によりシステム正当化が生じ、そのことで人生満足度が高まるという仮説は支持されなかった。

Power 感尺度について探索的因子分析を行ったところ 2 因子解(Powerless 因子; $\alpha = .822$, Powerful 因子; $\alpha = .810$)を採用できたため、それぞれの得点とした。これらを用いて SEM による分析を行った結果 (Figure 1), システム正当化は、Powerless の感覚が強くても、また Powerful の感覚が強くても生じる傾向があった。このことから、van der Toorn らの主張とは異なり、Powerlessness と Powerfulness の両方がシ

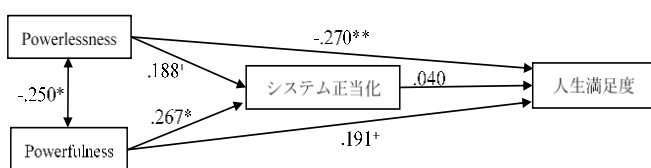


Figure 1. Power を 2 因子にしたときの SEM の結果 (研究 I)。

注) 数値は標準化推定値。

ステム正当化を高めることが考えられる。しかし、この両者では異なるプロセスがあるのではないだろうか。そこで研究 II では、Power 感とシステム正当化を媒介するものとして van der Toorn らが示唆した感情をとりあげ、Power 感を操作し実験を行った。

研究 II

方法 実験条件 2 条件(Power 感高・低)。参加者 大学生 53 名 (Power 高 26 名・低 27 名)。**手続き** 質問紙実験。質問紙では、Power 感の操作をした後、現在の感情状態、システム正当化の順で尋ねた。Power 高条件では参加者が他者に対して Power(影響力)を行使した出来事、低条件では他者が参加者に対して Power を行使した出来事を想起させ、それぞれその詳細とその時参加者自身がどう感じたかを記入させた。**質問項目** 感情状態尺度(中里, 2017; Positive 感情 6 項目; $\alpha = .947$, Negative 感情 6 項目; $\alpha = .833$, すべて 6 件法), システム正当化尺度(研究 I と同様, 低条件; $\alpha = .617$, 高条件; $\alpha = .461$)。

結果と考察 SEM による分析を行った結果、Power 高条件では Positive 感情が強く、Power 低条件では Negative 感情が強く喚起されていたが、感情を媒介してシステム正当化はせず、仮説は支持されなかった。以上の結果から、Power 感とシステム正当化の媒介要因は感情とは異なるものと考えられる。

総合考察

本研究は van der Toorn ら(2015)の追試を行ったが、結果を再現できなかった。その一方で、研究 I では Power 感を Powerful 因子と Powerless 因子の 2 因子に分けると、それぞれがシステム正当化をもたらすことが示された。しかし、Power 感を操作した研究 II では、Power 感の条件とシステム正当化との間の関係はみられなかった。その原因として、研究 II で統制条件を設置しなかったことが考えられる。

また、研究 II では、Power 感とシステム正当化を媒介するものとして Positive 感情と Negative 感情を取り上げたが、媒介効果は得られなかった。このことから、感情ではなく、自己肯定感や自己評価などの認知的要因が媒介している可能性が考えられる。今後は統制条件を設け、媒介要因について検討する必要があるだろう。